



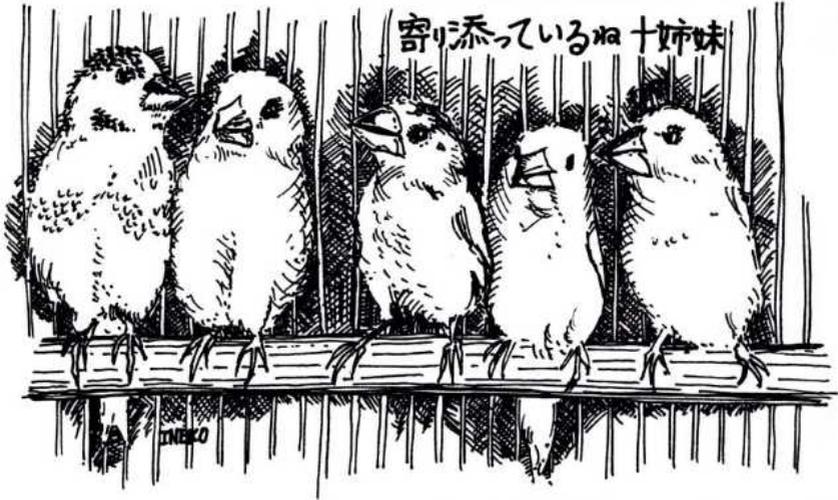
2002年 2月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

2002年2月
第30号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
 編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

EIBRK による漢点字変換のための入力マニュアル (3)	・・・ i
連載「点字から識字までの距離」(27) (山内 薫)	・・・ 1
東洋医学について (3) (小池上 惇)	・・・ 5
点字の読みづらさと漢点字の触読について (14) (岡田 健嗣)	・・・ 8
ご報告とご案内	・・・ 14
漢文のページ	・・・ 19
イラスト版「漢点字ってどんな字？」(29)	・・・ 21

点字から識字までの距離(二七)

山内 薫 (墨田区立緑図書館)

今回、羽化の会のホームページを立ち上げるに当たって、一番つきあいの長い私に岡田さんの紹介を書くようにという話が舞い込んだ。そこで今回は岡田さんに出会った当初の事を思い起こしてみたい。たまたま、図書館関係の月刊誌『みんなの図書館』（図書館問題研究会編 教育史料出版会発行）一九九二年一月号に「障害者サービスの現状と録音資料の提供」という原稿を書いた折、その枕に岡田さんとの電話でのやりとりを記録してあったので、それを引用させていただくことにする。時は一九九一年の十月、私が寺島図書館に勤務していた頃のことである。

先日横浜市に住む利用者から電話があった。彼は現在横浜市に住んでいるが、奥さんが墨田区に住んでおり、近い将来墨田区に住む予定で、以前にも漢点字のことで電話を貰ったことがある。その日の電話の趣旨は、フロッピーディスクによる月刊誌を作りたいのだ

が、その入力に協力してくれるボランティアがいるだろうかというものだった。彼はAOKの六点漢字・漢点字変換点字ワープロを持っており、ディスクのファイルを音声変換装置によって読むという形の月刊誌を作りたいのだと言う。その時の一時間以上に及ぶ電話による応答をかいつまんで紹介してみよう。

山 「ディスクによる月刊誌というのは、具体的に
は？」

岡 「フロッピーにせいぜい四百字二百枚程度の雑誌の情報を入力して、それを会員に郵送し、会員は音声変換によって読むという形式で、その入力をやってくれるボランティアを捜している。」

山 「一口に雑誌と言っても、例えば現在全国でおよそ二五〇種類余りのテープ雑誌が流通しているが、全部を収録しないまでも、墨字の雑誌と何とか対応するものはほんの僅かにしかすぎない。一方で墨田区の図書館だけでも五百種類、東京の公立図書館で一六〇〇種類、一般に流通しているものだけでも三千種類の雑誌が刊行されており、個々人の興味や関心に合わせて、しかも迅速に情報を提供するには、今までのようなテープ雑誌の提供には限界があるので、墨田区では目次だけを読んだテープを作成して聞いてもらい、興味のある記事についてプライベートに電話で、あるいは

はテープに収録して聞いてもらっている。また電話でそのまま目次や記事の一部を読んでいる。公共図書館として蔵書を提供するという意味では、そうしたサービズを中心にしていきたいと考えている。ディスク・マガジンといっても、どんな雑誌を選択するかということが一番問題だが・・・」

岡 「例えば、ポラ化粧品で出している『IS』など最近企業が出している雑誌にも面白い記事が出ている。そういう情報があること自体を知らないで、現在あるテープ雑誌などの少ない情報で満足してしまっている人が多いので、特定の雑誌に限定せず、なるべく広い範囲の雑誌から記事を拾っていくことができればと思っている。」

山 「『i i c h i k o』とか『ハーヴェスタ』とか、古くは『エナジー』等も面白かった。例えば企業にそうした雑誌をディスク情報にさせるということも考えられる。」

岡 「企業イメージをよくするということから、積極的に働きかければ可能性がないこともないかもしれない。」

山 「しかし著作権のことがあるから、そう簡単にはいかないだろう。ところで漠然と雑誌といっても、主にどんな分野の雑誌を想定しているのか。」

という訳でディスク・マガジンについてはそんなやりとりがなされたのだが、そこから話は次のように脱線していった。

岡 「私が興味を持っているのは文学で、主な文学関係の六誌程の雑誌には眼を通しています。」

山 「えっ、『文学界』や『群像』『新潮』『文芸』なんかですか。」

岡 「ええ、目次を読んでもらって読みたい記事を買ってライベートに録音してもらっています。『文学界』だけは全部を毎月九〇分テープ一二〜一三本で読んでいます。最近では小川洋子がいいですね。」

山 「今、女性の作家が面白いですからね。江國香織えくに かおりの『さらさらひかる』は抜群でしたよ。彼女は『フェミニナ』という雑誌の賞を取ってデビューしたんですが、児童文学も書いていて、どれもなかなかいいですよ。」

岡 「江國香織は読んでいませんが、文芸誌では『海燕』と『現代詩手帖』が面白いですね。」

山 「えっ、『海燕』と『現代詩手帖』を読んでいるんですか。すごい。『海燕』では今は休んでいますが本隆明よしもと たかあきが連載をしていたし、『現代詩手帖』では藤井貞和ふじい さだかずと瀬尾育生せおい いくおの湾岸戦争論争が今話題です。」

岡 「ええ、それらは皆読んでいます。『海燕』は全体のほぼ三分の一を毎月、プライベート・サービスという形で読んでもらっています。」

山 「いやー感激ですね。こんなこと言うのと失礼ですが、テープ雑誌の作成状況や私の知っている視覚障害の人たちの興味や関心から見て、『海燕』や『現代詩手帖』を読んでいる人がいるとは思いませんでした。最近詩では平出隆と吉岡実を集中的に読んでるんですが、平出隆の『胡桃の戦意のために』はいいですよ。」

岡 「ええ、平出隆、入沢康夫なんかは好きです。でも詩はテープや点字では限界があるので、読むのはほとんど評論です。」

山 「そうですね。入沢康夫の『わが出雲・わが鎮魂』等は、視覚的な要素が強くて、例えば逆さ文字に鏡をあてて読むようなところが出てきますからね。」

岡 「そうですね。やはり現代詩は漢字や眼で見た印象が大切だと思つて作品そのものはほとんど読んでいないんです。せめて漢点字で読めるといいんですが。」

山 「漢点字では詩を点訳したものはないんですか？」

岡 「ええ、ほとんどありません。俳句や短歌をやつ

ている視覚障害者は結構いるのですが、現代詩どころか、そうしたものの漢点字の本も皆無と言つていいでしょう。」

山 「そうですね。昨年の秋に『新潮』の臨時増刊で『日本の詩一〇一年』というのが出ました。一年に一作品を選んで一〇一年、一〇一人の一〇一の詩で構成するという、なかなか面白いアンソロジーなんです。とりあえず戦後の部分の詩を漢点字で打ち出してみましようか。緑図書館で点字ワープロを導入してパソコン点訳を始めて以来その需要は大変なもので、点字ワープロを置いてある録音室はいつ行つても、点字グループの人や漢点字の利用者が打ち出しや校正をやつていてという盛況ぶりです。」

岡 「それは是非お願いしたいですね。その臨時増刊は平出隆と辻井喬、正津勉と谷川俊太郎の二つの対談は読みましたが作品そのものは読んでいないので楽しみます。」

こうして話は止め度もなく続き、今年はランボーの没後百年にあたり、寺島図書館で彼の命日の一日前の十一月九日に詩人の渋沢孝輔に「見者と修羅ーランボーと宮澤賢治」という講演会をお願いしたこと、もう一本の講演会に赤坂憲男か『男はどこに居るのか』の小浜逸郎を考えているが、赤坂憲男の天皇制論は講演

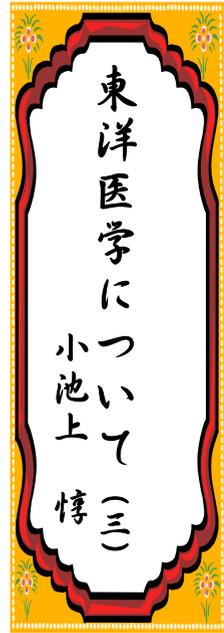
会には馴染みにくいと話すと、彼はすかさず赤坂憲男なら異人論が面白いとサポートしてくれた。そしてどちらかと言えば小浜逸郎の方の話を聞きたいが、丁度その二人が中心となって出していた同人誌『ておりあ』のバックナンバーが手元にあるので送るから読んでみて欲しいと、二日後には『ておりあ』5冊が郵送されてきた。また小浜逸郎の話から上野千鶴子うえのちづこに話及び、最近出た『性愛論』では森崎和江もりさきかずえとの対談が圧巻であったこと、さらに小浜逸郎がよく書いている『現代思想』や吉本隆明が出している『試行』の話の中では、『現代思想』は表紙を見ただけで朗読者に敬遠されてしまうこと、『試行』は数年前まで眼を通していたが、広告が面白く、村瀬学の名前を知ったのもその広告からであったこと、寺島図書館で『試行』をとっているのが今度目次を読むこと等々、話題はあちこちに飛び、時間があつという間に過ぎていった。最後にお互いがいみじくも漏らした言葉は「視覚障害の人とこういう話ができるとは思わなかった」「図書館員とこういう話ができるとは思わなかった」だった。

その後、パソコン点訳をやっている人に協力してもらって、先の『日本の詩一〇一年』から戦後の部分で取り上げられた四十六の詩作品、平出隆の『胡桃の戦意のために』、吉岡実のアンソロジーを私の独断と偏

見で選択し、ワープロソフトの一太郎で入力してもらい、BRPCという漢点字のソフトで打ち出す作業に入った。そして数日後に戦後の黒田喜男くろたよしお、鮎川信夫あゆかわのぶお、北村太郎きたむらたろう、田村隆一たむらりゅういちの詩と吉岡実の「夏-Y・Wに」を試しに打ち出して、漢点字訳のやり方について相談するために彼に送った。漢点字で初めて現代詩を読んだ彼は多少興奮気味で電話をくれ、毎日外出するときにも持ち歩いていると話し、吉岡実なら「僧侶」が是非読みたいとリクエストされた。またこうしたものを自分一人が享受するのは勿体ないので、漢点字協会などを通じてPRしたいと語った。

(会話の部分に発言者の頭文字を挿入した)

以上が雑誌に掲載された枕の部分の全文です。翌年には横浜漢点字羽化の会が誕生し、多くの漢点字書がこの世に生まれることになりました。講演会で話をして下さった渋沢孝輔氏は亡くなられ、『試行』は休刊となり、歳月を感じます。そして、この四月で羽化の会も発足十年を迎えようとしています。私は今でも、岡田さんのように本や雑誌を読んでいる視覚障害者に出会うことはありません。それだけに、もっともつと様々な資料が存在することを広く伝え、その資料が漢点字訳という本来の形態で読めるようにするために一層努力しなければならぬと考えています。



三 臓腑

(一) 人体の構成

東洋医学では、人体は、臓腑（内臓）、四肢（手足）、百蓋（骨）、五官（感覚器）、皮毛（皮膚）、筋（腱）、筋肉（筋肉）、血（血液）、脈（血管）からできているとされています。

(二) 五臓六腑

ア 五臓

肝、心、脾、肺、腎を五臓といいます。現代医学的にいうと、実質器官であり、働きの上では、物質の生産と貯蔵を行っています。ここで注意しなければいけないのは、東洋医学の五臓は現代医学の内臓とは全く

同じものではないということです。例えば、東洋医学の肝は、現代医学の肝臓そのものではなく、内臓の働きのうち、「木」の性質を当てはめたものと考えた方が分かりやすいと思います。後からも述べますが、東洋医学では、五臓に精神作用があると考えられており、それぞれの病の時、精神状態に変化があるとされています。

イ 六腑

胆、小腸、胃、大腸、膀胱、三焦を六腑といいます。現代医学的には、中空器官で、働きの上では、物質の運搬や排泄を行う器官と考えられています。

ウ 奇恒の腑

東洋医学では、形は腑に似ていて、働きが臓に似ている器官を奇恒の腑と呼び他の臓腑と区別しています。奇恒の腑に属する器官には、骨、髄、脳、脈、胆、女子包（子宮）があります。骨や髄、脈などはどう考えても内臓とは言えないようですが、これも東洋医学独特の考え方です。

(三) 臓腑と身体組織・諸器官との関係

五臓は五行の色体表で同じ性質を持つものとの関係しています。例えば、五行の「木」の性質を持っている

肝は、腑では胆、五主では筋、五根では目と関係があるとされています。このため、肝に病気があると、筋が引きつったり、視力が落ちたりするのです。

(四) 臓腑の形態と生理事用

ア 肝：第9胸椎に附着し、次のような働きをしています。

- ① 血を貯蔵し、血液量を調節する。
 - ② 筋を支配する。
 - ③ 目を支配する。
 - ④ 気血の流れを維持し情緒を安定させる。
 - ⑤ 精神的には、根気強さを養う。
- ここで、第9胸椎に附着するというのは、第9胸椎のあたりに最も反応が現れやすいということです。また、気血とは、後で述べる経絡の中を流れているものです。

イ 心：第5胸椎に附着する。

- ① 血脈を司る。
- ② 神を蔵する。
- ③ 舌を支配する。

血脈を司るというのは、循環機能の原動力となるということで、ほぼ現代医学の心臓と一致しています。

神を蔵するというのは、何となく神秘的な機能を持っているということ、例えば精神的緊張の時、胸がどきどきするなどの経験から考え出されたことではないかと思われます。③の舌を支配するというのは、単なる五臓の色体表との関係ではないかと思われますが、それでも心の病のとき、舌がもつれたりすることがあるといえますから、全体的外れというわけではありません。

ウ 脾：第11胸椎に附着する。

胃の上に覆い被さり、形は馬蹄形、壺形または鎌形などといわれています。

- ① 運化作用（消化、吸収）
 - ② 統血作用（経脈内の血液を漏らさない作用）
 - ③ 口や筋肉を支配する。
 - ④ 精神作用としては、意志に関係する。
- 働きや形から考えると、現代医学の脾臓や膵臓・十二指腸を合わせたもののように思われます。

エ 肺：第3胸椎に附着する。

諸臓の蓋となつていられるといわれています。

- ① 気を司る。
- ② 水道を通調する。（水分代謝を調節する）
- ③ 皮膚を支配し、鼻に開く。

諸臓の蓋となるというのは、臓腑の中で最も上にあ

るという意味です。機能や形態から見て、現代医学の肺に似ていますが、水分の代謝など少し違うところがあります。

才 腎：第2腰椎に付着する。

黒紫色で、石の玉のような形をしているといわれています。

- ① 精を蔵する。
- ② 先天の元気を宿す。
- ③ 水の代謝を司る。
- ④ 納気を司る。
- ⑤ 骨を支配する。
- ⑥ 耳を支配する。

ここで、納気というのは、吸息のことで、腎も呼吸に関係すると考えたものと思われれます。また、先天の元気とは親から受け継いだ生命力ということ。現代医学の腎臓の他に、生殖器や副腎の機能をも含めたものと思われれます。

以上で五臓の説明は終わりますが、現代医学の内臓とは随分違うことが分かると思います。「病は気から」という言葉がありますが、病気になるると精神状態にも変化が起こり、又、精神的影響によって病気になるということから、臓腑と精神とを結びつけたものと

思われれます。東洋医学の解剖がしっかりしていないことから、東洋医学そのものの価値も低く見られることがあります。あくまでも東洋医学は臨床が第一で臨床的な経験から内臓の機能も導き出されたものと思われれます。

六腑については紙数の関係で省略させていただきました。最後に三焦について少し述べさせていただきます。五行理論では、五臓五腑でよいわけですが、これを経絡に当てはめようとするとなつづつ足りなくなります。そこで、臓では心包、腑では三焦を加え、経絡と合わせたわけです。その三焦は形が無く働きだけを持つ腑であるといわれていますが、すべての臓腑の機能を総合したものであるということができないのではないかと思います。三焦という名の通り上・中・下の三つの部分に分かれますが、上部は心と肺、中部は肝・胆・脾・胃、下部は大腸・小腸・腎・膀胱を総合したものです。

臓腑の説明だけで紙数がつきてしまいました。次回 は経絡と経穴・気・血・津液について書くことにします。



点字の読みづらさ

漢点字の触読について(十四)

横浜漢点字羽化の会 代表 岡田 健嗣

六 日本語点字の成立とそれが残したもの(承前)

日本語点字委員会(つづき)

前号では、本誌の読者のご寄稿の、二四号(二〇〇一年二月)に掲載させていただいた記事『漢字教育と日本語点字委員会』に依拠しながら、視覚障害者(児)が、漢字の教育を受けられない現状について、日本語点字の表記法を研究し普及を図っている日本語点字委員会(以下、日点委と言う)の、漢字と視覚障害者に対する姿勢を考えてみました。今回もその続きです。

この記事の著者は、昨年初頭に催された、点字の新たな表記法と、点字表記の認定試験の説明のための集会の席上、日点委の三名の方々が、質議に答える形で、視覚障害者と漢字教育について、初めて見解を開陳されたことを述べて、しかし誠に残念なことに、その見解が、大変否定的なものであったことを記されて

います。

前号で、私はこの記事をお借りして、ここにあるお三方の内のお一人の見解に触れて、日点委の姿勢の一つをただしました。私の理解では、その見解には二つの誤りがあるように思われたからです。

一つは、日点委は私的な団体であって、公的な責任は負わないとおっしゃっておられることです。一般に個人であれ団体であれ、人は社会で活動する限り、私的な立場と公的な立場とを合わせ持つて臨みます。従って、そこに生ずる責任も、私的なものと公的なものと、コインの両面のように、必ず出現して来ます。たとえごく小規模な、個人的な集まりであっても、最低の社会のルールとマナーを守るといふ、誠に当然の責任の存在を、否定できる人はいないでしょう。それと同様、日点委が、視覚障害者の関係団体の委嘱を受けた私的な団体であるからと言って、公的な責任を免れる訳ではありません。まして日点委は、日盲社協という全国的な視覚障害者関係施設の団体と、そこで活動する視覚障害者とその団体、ボランティアとその団体、またそこで働く職員に大きな力を及ぼしていること、さらに全国の視覚障害者一人一人に、点字という文字を通して、多大な影響を与えているこの現状は、社会のルールやマナーを守るといふ程度をはるかに超

えて、公的な責任の所在を指しているのではないかと
思われます。

もう一つは、日点委は仮名点字の表記には責任があるが、漢字の点字には責任を負う立場にない、と発言していることです。果たしてそうでしょうか？

日点委は何をするための組織なのでしょう？私たちが点字を使用する際、当初、日本語の点字には漢字がありませんでした。従って当時の日点委が仮名の点字の研究に力を傾注したというのも頷けることです。

しかし日本語の表記は、仮名だけで行えるものではないことは、火を見るよりも明らかです。本来ならば日点委自身が、このような情況にメスを入れて、漢字を点字で表記する方法の開発に着手しなければならぬ立場なのではないでしょうか。しかし現実には、日点委は視覚障害者に漢字を与えるどころか、その責任を放棄してしまいました。そのために、日本語を母国語として生まれた者、日本語を学びたいと希望する者の中で、唯一視覚に障害を持つ者だけが、それを表記する文字を、公式には、未だに持てずにいます。このことは、一つに、日点委の体質のもたらした情況と考えざるを得ません。

以上が、前回に述べたところです。

*** お二人目のご発言は左のとおりです。***

《六点漢字に関しては、筑波大附属盲で実験的に検証したこともあるが、創案者の長谷川先生自身、教育の場で児童・生徒に教えるものではないとの意見である。漢点字に関しては、読み書きの面で大きな負担がある。漢点字を推進する会の代表者の弁にもあるように、利用者も少なく減少する傾向にあるのは、何らかの難点があるからではなからうか。仮名点字が一一〇年継続している事実と比較して欲しい。従って、教育の場で点字による漢字教育を採用する考えはない。漢字を必要とした場合には、自主的に勉強すれば、一年もあればマスターできる。》

この委員の方は、何を言わんとしているのでしょうか？著者は、発言者のお話を要領よくまとめて下さっておられますが、ここで私は前回同様、もう一度整理して、読み解いてみたいと思います。

a. まず六点漢字について述べている。

筑波大附属盲学校で実験的に指導を行って見たが、創案者の長谷川先生（元同校教諭、長谷川貞夫氏）

が、学校教育で取り上げるものではないと言っている。

これは、ある意味で卓見です。本稿でも次章で考える予定の、私も意見を同じくするところのものです。ただし、長谷川氏やこの委員の見解と私のそれとは、そこに至る過程も、またその後の志向も異なっているものと想像されます。従ってここではこれに深く触れず、次回に譲ることにします。

しかしここで注意を喚起されるのが、筑波大附属盲学校で取り上げたのは六点漢字であって、漢点字ではないことです。六点漢字に関してはこの見解も有効でしょうが、漢点字を検証せずに、六点漢字から類推して、それに立って同様の結論を導くことは、大変遺憾なことと言わざるを得ません。この委員の見知には、漢点字に対する評価に、このような類推が決定的に影響を与えていると言っても過言ではありません。

b. 漢点字は読み書きが困難であって、その使用者も減少している。

それは、漢点字に何らかの難点が含まれることを思わせるもので、そのことから、教育課程で取り上げる考えはない。

これも次章で、六点漢字と比較しながら、漢点字が

如何に読みに優れ、如何に日常の使用に耐えうる文字であるか、証す予定です。

しかし、漢点字の使用者の減少を、漢点字に欠点があるからであろうという発言は、決して受け入れられるものではありません。このような見解は、いわゆる「ためにする中傷」と言うべきもので、次の議論と併せて、ここで答えておきたいと思えます。

c. 視覚障害者は明治以来、仮名の点字でやって来た。

そしてそれで充分と考えている人が大半である。たとえ漢字の必要性を感じて、漢点字の学習を希望する人が現れても、独修でも一年もあればマスターできる。教育課程で取り上げる必要はない。仮名点字の優秀性は、これまで廃れずに来たことで分かる。

ここに至って、識字と教育論に一歩足を踏み入れることとなります。日本の視覚障害者が漢字を持たずにいることが、仮名の点字の優秀性を証明するもので、漢字の知識を身に付けたければ、独修で充分というのがこの見解です。この見解が、教育の現場で実行されているのが現状で、それを考えるだけで、何とも心の冷えるものを覚えます。

我が国の識字率は一〇〇パーセントと言われていま

す。昨春秋それを確認すべく、総務省・統計局にお電話をしてみました。

それによると、現在（二〇〇一年）の統計はなく、最も新しいものでも一九九〇年のものとのことでした。当時我が国がUNESCOに報告した資料によれば、識字率はやはり九九・八パーセントで、ほぼ流布されている数値を裏付けていました。

しかし何故一九九〇年以降、統計が取られなかったのでしょうか？その訳は、実に我が国の教育の根本に關わっていました。

我が国では識字率は、その算出に、国民の十五歳以上の人口に、初等教育を終了した人のうち、十五歳を越える人の占める割合として来たとのこととす。ところが一九九〇年辺りを境に、登校を拒む児童・生徒が目立つようになって、この算出基準では、正しいデータを検出できないという見解に固まったとのことでした。ただし、新たな算出基準を定めるまでも至っていないのが現状ともおっしゃっておられました。また、この算出基準は、我が国のもので、他国ではどうかということ、UNESCOをお訪ねして調べなければ分からないというお話でした。

我が国の識字率についてここで分かったことは、一九九〇年以降はともかく、これまで私たちが漠然と考

えていたものでなく、文字の読み書きができる人の割合というのでなく、初等教育を終了すれば文字は自動的に習得できるとした、その人の割合であつて、しかも読み書きがどの程度できるかという水準を、直接問うているものではなかつたのです。それであれば、視覚障害者が漢字の教育を受けていない現状も、我が国の識字率の数値には反映されないのも当然です。これを押し並べて言えば、人が漢字を知つていようと知つていまいと、文字が書けようと書けまいと、小学校さえ出ていれば、識字率として記録されるのです。このことを反対側から見れば、明治期に制定されて、戦後さらに強化された義務教育制度への強い信頼があつて、しかもそれは確かに識字に大きな力を發揮したことを意味します。初等教育の義務教育化が、我が国の識字率を飛躍的に上昇させたことは確かなことです。

このように、公教育の普及と、文字の普及とはパラレルなもので、教育の力なしには、識字の向上はないのです。視覚障害者が、一人文字の世界から取り残されているのは、この教育制度に、他と同様に漢字の教育が盛り込まれなかつたからで、このことを、直視して行かなければなりません。先の日点委の委員のお話にある仮名点字の優秀性と言うのは、実は単に、この点字に漢字を取り入れなかつたこのことを言っている

に過ぎません。

またこの委員の言う、漢点字の使用者・学習者が減少している理由を、漢点字の難点に求めるのは当たりません。

一九八二（昭和五十七）年、毎日新聞社から、「盲人のための漢字学習事典」（志村洋著）という点字書が刊行されました。この本は二千字余りの常用漢字と人名漢字を点線文字で表して、一つ一つの文字を仮名点字で説明したものです。初版はあつと言う間に完売してしまい、危うく私も手に入れ損なうところでした。

当時漢点字の創案者の川上泰一先生は、漢点字の通信教育に総力を傾注されていて、その受講者は数千人に達していたといえます。点字使用の視覚障害者が約二万人といえますから、その四割が漢点字の習得を志したことになります。先生は、毎晩午前三時・四時まで、受講者の書き取りや質問に答えておられました。

このように当時は、視覚障害者の漢字への知識欲が表面に現れて、漢点字を習得することで、漢字の世界の門を叩こうとした人が沢山出て来しました。点字毎日でも、漢字のページや漢点字のページを組んで、そのニーズに応えようとしておりましたし、ここに挙げた本の発行も、これに添ったものでした。また他の点字

書の出版所でも、同様の企画の点字書が、次々と刊行されました。

しかしこれも長くは続きませんでした。漢字や漢点字へのニーズは高まったものの、肝心の盲学校や点字図書館は、このような動きを、全く省みることがなかったからです。残念なことに、多くの人が学習を最後まで続けられずに、中絶してしまいました。こうして「漢点字は難しい」という評価の一人歩きが始まったのです。しかし、文字の習得はこのようなもので、公教育の責任にあつて初めて、安心して取り組むことができるのです。その後も心有るボランティアの皆さまのお力で、民間では引き続き漢点字の普及活動が続けられておりますが、基本的に独習をしなければならぬ現状は変わっておりません。

一昨年（二〇〇〇年）、視覚障害者（児）への漢字教育を求めて、五月十日に文部省を、七月七日に筑波大附属盲学校をお訪ねしました。そこで視覚障害者に漢字教育がなされていない現状と、そのような者が社会に巣立ってから、如何に苦労しているかというお話を聞いて、漢字教育の必要なことをお願いして参りました。ところが、文部省の係官も、盲学校の高等部の国語科の先生である塩谷治先生も、先の日点委の委員と同じご返答でした。

そこで言われたことは、盲学校で漢字、それも漢点を教えるのは、生徒の負担が大き過ぎる。ただでさえ学習しなければならぬことが多いのに、そこに漢点を加えるのは無理である。漢字の教育は、漢字のあらましを教えて、それに興味を持った者にだけ、別枠で教えればよいし、それだけの力のある生徒であれば、独力で充分習得できるはずだ。現在でも漢字については、読みの音と訓や、形の偏と旁については、既に教えているので、これ以上手を広げる積もりはない、というのでした。

このようなお話の中に必ず出て来るお答えに、「学習負担」というのがあります。これは現状を超えた学習は、生徒の負担が大き過ぎるといふ論理です。一見説得力があるように見えますが、実際は、言い訳をしているに過ぎません。

現在のように、視覚障害者（児）の文字の教育に、仮名点字しか取り上げられない場合を考えてみて下さい。初等、中等、高等と、教育レベルが進むに連れて、教科書等で使用される用語も、専門性を増して行きます。その専門用語というのは、ほとんどが漢語の熟語で、漢字の持つ意味によって組み立てられているものです。このことは、漢字の知識なしには、踏み入ることの許されない場所があることを意味していま

す。にも関わらず、教育課程は他と同様に存在して、同様に進んで行きます。そのとき生徒である彼らは、どうしているのでしょうか。それは最も簡単な方法、つまり（暗記）です。漢字の意味を理解できない以上、それでも課程を終了しようとするれば、この（丸呑み）で対処するしかないのです。

しかし、予め漢点字の学習を、初等教育の段階から行っておれば、このような苦勞の必要はありません。勉強の内容が理解できるからです。すなわち、過度な「学習負担」とは、理解できない学習を、理解できないままに押し進めるところに発生するもので、理解をするための方法としての文字教育は、それには当たりません。

現在私たちは、漢点字の学習者の皆さまを応援しております。ご自身のお力でお勉強していただくことは変わりありませんが、漢点字の習得者も、幾度も立ち止まりながら、何とか頑張った人ばかりです。ですから、皆さまのご苦勞を、我が身のことと感じられませう。くじけつつも少しづつお進みいただくことをお祈り申し上げます。

（つづく）

◆ 新年会を行いました

去る一月二十日(日)、恒例となりました新年会を、ホテル・リッチ(横浜駅西口)の力車にて行いました。

お客様を交えて、楽しい一時を過ごしました。本誌表紙の絵をお描きいただいている岡稲子様は、そのモデルでもある可愛いお嬢様を伴ってご参加下さいました。

会は、乾杯の音頭を、読者の田中秀臣様におとりいただいて始まり、それぞれの自己紹介と歓談の後、持ち寄りの品々のくじ引きで盛り上がりました。

普段お仕事などで顔を合わせる機会の少ない皆様とお会いできて、大変有意義な会になったものと感謝申し上げます。

今年も漢点字と本会にとりまして、さらなる前進の年になりますことを祈念して止みません。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

◆ 丸谷才一著、『新々百人一首』(新潮社)

の漢点字訳が完成します

横浜市中央図書館へ、二〇〇一年度に納入を予定しております同書が、完成を迎えました。

本書は、著者丸谷才一氏の並々ならぬ意欲作で、平成十一年、「第二十六回、大佛次郎賞」を受賞されました。

構成は、王朝勅撰歌集に倣って、「春・夏・秋・冬・賀・哀傷・旅・離別・恋・雑・釈教・神祇」の部立になっています。極めてユニークで、興味の絶えない書物です。

漢点字版は全九巻、個人でお求めの方へは、バインダー製本も致します。

以下、著者の「はしがき」からの引用です。

はしがき

わたしの『後鳥羽院』が出てしばらくしたころ、つまり今から二十年以上も前のことになるが、何かの折に、当時「新潮」編集長だった谷田昌平さんから、『小倉百人一首』の向うを張つて和歌を百首選んでみないかと提案された。王朝和歌が日本文学の中心部を占めるといふのはわたしの持論だし、それに『小倉百人一首』の撰者藤原定家はわが国最高の批評家で、われわれの文学史のほとんどの時代は彼の文学観によつて指導されてゐる。そして彼の詩情の感じ方を日本人全体に普及したものが『定家八代抄』でも『詠歌大概』でもなく、『小倉百人一首』であつたことは、念を押すまでもない。日本人の恋愛論も風景美学も彼のこの小詞華集によつて規定されてゐる。その人と腕くらべすることの光栄を避けて通るわけにはとてもゆかない。分

析して言へばそんな気持ちになるのだらうが、とにかく、気がついてみるとわたしはこの仕事を引き受けてゐた。

もともと『百人一首』とは縁が深く、私をはじめて知つた由緒正しい文学は、姉たちの取る歌がるたの、父の詠みあげる読み札だつたらう。これはたいの日本人に共通する文学の初体験かもしれないが、わたしの場合いささか違ふのは、中学二年生か三年生のころ萩原朔太郎の詩に熱中し、

殊よりある女に贈る

山の頂上にきれいな草むらがある、
その上でわたしたちは寝転んで居た。

眼をあげるとほい麓の方を眺めると、
いちめんひろびろとした

海の色色のやうにおもはれた。
空には風がながれてゐる、

おれは小石をひろつて口にあてながら、
どこといふあてもなしに、

ぼうぼうとした山の頂上をあるいてゐた。

おれはいまでも、お前のことを思つてゐる
のだ。

といふ詩にとりわけ夢中になつてゐたことである。後年わたしはそのことを思ひ出して、あれは詩人が、

大式三位
有馬やま猪名の笹原かぜ吹けば
いでそよ人を忘れやはする

の影響下に書いたものではないか、そして幼いわたしもまた、大式三位の作と萩原朔太郎の作とを二重写しにして文学的感銘を受けてゐたのではないか、と思つた。成立事情と鑑賞態度についてのこの推定は正しいやうな気がする。すなはちわたしは十代のころ、日本文学史を縦断するものとしての藤原定家の詩学を漠然とながら感じ取つてゐたらしい。さういふ生れ育ちであればこそ、やがて『日本文学史早わかり』に結集するやうな勅撰集重視の考へ方を抱懐するやうになつたのだらうし、「週刊朝日」名物の『パロディ百人一首』の選者を井上ひさしさんと二人で毎年勤めるやうになつたのだらうし（最初の回の大賞、阿部野仲間作、対猪木戦の感想を問はれて詠める、モハメド・アリ「顎の裏を打ちに出てみれば白ける喃不意のゴロ寝に俺は困りつ」はいまだに忘れがたい）、さらには『別冊文芸読本 百人一首』などといふ奇想の書を編むことになつたのだらう。いや、もつとさかのぼつて言へば、ごく初期の長篇小説に版元の反対を押し切つて『笹まくら』といふ題をつけたのもこれと関係があるに決つてゐる。すべては猪名の笹原の風にはじまる。

(中略)

谷田さんとは何度か話しあつた。といふよりもむしろわた

しの考へを述べて同意を得た。そのなかで大事なのは、まづ、この詞華集にしてかつ注釈と評論集を兼ねる本がわたしの王朝文学史になるやうに仕組みたい、それによつてわたしの文学史の展望を差出したいといふことであつた。これは簡単に言つてしまへば「アララギ」ふうの史観に対する拒否である。つまり『万葉集』が屹然と聳えたのち、勅撰和歌集といふ無視して差支へないものが二十一もつづき、その時代では源実朝だけが推奨するに足り、やがて平賀元義その他があつて、それから「アララギ」の歌人たちが輩出するといふ考へ方を正さうといふのである。打割つて言へばわたしはいはゆる近世和歌にも現代短歌にもあまり親身な者ではない。悠久の昔にはじめて応仁の乱のころに終焉しゆうえんを告げた王朝和歌といふこの文学形式を明確に認識しなつかしむことが、わたしと和歌との重要な関係なのである。それゆゑわたしの本は、古代の帝の、むしろ呪文に近い何かなのかもしれない口ずさみから、中世の連歌師の、俳諧を予感させる佻言わびごとまでを収め、配列し、解釈し、鑑賞する試みになつた。さういふ移り変りの姿のなかにわたしは天皇家と藤原家の文藝としての王朝和歌の全史を示したいと願つたのである。

もう一つ谷田さんには、一篇一篇の長さを統一しないといふ件について了承を得た。これは『小倉百人一首』の注釈類を見てみるとすぐに気がつくことだが、一首について

どれもみな見開き二ページでゆくため、どうもうまくゆかない。詳論すべきものを手抜きしたり、軽くすませて然るべきものを無理に引延したりしてゐる。むしろ長短繁簡とりどりのほうだが、読者にとつても気が變つて楽しい面もあるはずなのに。これをかなり大胆に実行して、百枚に近い評論から百字に満たない小品までをとりまぜる本になつたことは見られる通りである。読者はなるべくならば、律儀に順を追ふことなく、気の向くままに拾ひ読みしていただきたい。詞華集はもともと、『三体詩』だらうと『フェイバー版現代詩集』だらうと、さういふ読み方がふさはしいのである。

配列は二通りある。内容順は、勅撰集とりわけ『新古今集』の部立ぶだてに従つて、紀貫之の春のよるこびの歌にはじまり、紫式部の島守る神をたたへる挨拶の歌をもつて終る。この順序は歌番号の上の数字で示す。時代順は言ふまでもなく『小倉百人一首』にならふ。この順序は歌番号下の数字で示す。読者は巻頭、巻尾二種の目次を眺めて、わたしの思ひ描く王朝和歌の世界を感じ取つていただきたい。

(後略)





『東洋医学臨床論 鍼灸編』（医道の日本社）
の漢点字訳が完成しました

大変お待たせ致しました。本書は、鍼灸術の教科書として、東洋医学を論じたものです。本文四巻、図録（立体コピー版）一卷、個人向け、本文六、〇〇〇円、図録三、〇〇〇円、計九、〇〇〇円です。

お申し込みは、

〒131-0041 墨田区八広六・三三・一 グリーン

ガーデン二〇二 岡田健嗣

☎〇三・三六一三・三二六〇

E-MAIL : takeshi-okada@h2.dion.ne.jp



港南台第一小学校を、再びお訪ねして
参りました

昨秋、小学四年生の国語の教科書で、視覚障害者が点字を読んでいることを学んだ生徒さんたちのご希望で、同校にお招きをいただきました。そこで、私(岡田)は、同校をお訪ねして、視覚障害者の生活や、一般の皆さまとの接点、また互いのコミュニケーションについてお話しさせていただきました。

年が明けて、この一年勉強したことをまとめたものの展示会が行われるというご案内をいただきました。その中

に、私がお話しした内容もあるとのことでしたので、一月三十一日に、再度お訪ねして参りました。

お訪ねしたところ、四年生の生徒さんたちが案内係になって下さって、まず、四年生の展示の説明をして下さいました。ところどころに点字のラベルを貼って、私の便宜をはかって下さいました。一所懸命説明して下さい、感激して帰って参りました。大変楽しい時間を持つことができました。心より御礼申し上げます。また皆さまにお会いできる機会がございましたら、願っております。

以下は、これに先立って、私がお話ししたことへの感想を、メールで送って下さったものです(編集の都合上一部を割愛させていただきました)。

岡田さんへ

点字は、不便なことがいくつあることや、点字の種類には、漢点字や、音符の点字、数字の点字などがあることが分かりました。

これからは、出かけたとき、点字図書館を見つけたら、中に入って、点字の本を読んでみます。

ぼくは、岡田さんの話を聞いて、いろいろなこと

が分かりました。点字のこともよく分かりました。目の不自由な人に会ったら、5秒見て、困つていそうだったら、勇気を出して「どうしましたか」と声をかけたいです。ありがとうございました。

第一小のみんなに点字のことや、道に迷つて困つてしまった時のことを教えてくれて、ありがとうございました。時計で時刻が分かるのかなと思いましたが、時計のふたをあけて、指で時刻をさぐり、時刻を読むものとボタンを押し、音声で知らせてくれるものがあると知りました。「点字図書館」なんてあると思いませんでした。「点字図書館」に行つてみたいです。点字図書館のことを教えてくれて、ありがとうございました。点字を打ったときに、むずかしいと思ひました。特に、だく音、はんだくおん半濁音がむずかしかったです。これからは、目の不自由な人に会ったら、協力したいと思ひます。

ぼくたち、わたしたちは、岡田さんのお話を

聞いて、こんなふうに思ひました。

☆ぼくは、岡田さんのお話で、字を持つ喜びがもつと

よく分かりました。

☆わたしは、漢字がないとどれだけたいへんか分かりました。

☆ぼくは、岡田さんのお話で、目の不自由な人でも、不自由なところがあまりないことが分かりました。

☆わたしは、岡田さんの話を聞いて、駅などで迷つたときは、わたしたちが迷子になったときよりも不安なかなあと考えてしまいました。

☆目が不自由な人のことを教えてくれてありがとうございます。

ありがとうございました。

ぼくは、身体しようがい者の人がいたら、「お困りですか」と声をかけようと思ひました。



港南台第一小学校の生徒さん達と。

漢文のペロジ

守株

宋人^ニ有^リ耕^ス田^ヲ者^一。

田中^ニ有^リ株^一。兔走^{リテ}触^レ

株^ニ折^{リテ}頸^ヲ而^レ死^ス。因^{リテ}釈^テ

其^ノ耒^ヲ而^レ守^リ株^ヲ。冀^フ復^タ

得^シ兔^ヲ。兔不^{シテ}可^{カラ}復^タ得^一、

而^レ身^ハ為^{レリ}宋^ニ国^ノ笑^{ヒト}。

(『韓非子』より)

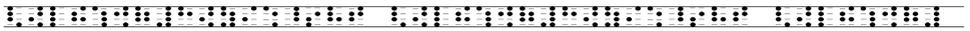
株を守る

宋人^ニに田^ヲを耕^ス者^有り。田中^ニに株^有り。兔走^リて株^ニに触^レ、頸^ヲを折^リて死^ス。因^テりて其^ノ耒^ヲを釈^シて株^ヲを守^ルり、復^タ兔^ヲを得^ルんことを冀^ムう。兔復^タ得^ルべからずして、身^ハは宋^ノ国^ノの笑^ハいと為^レり。

守株とは古い習慣を守つてゆうずうのきかないことをいう。北原白秋の「まちぼうけ」の童謡もこの話によつてゐる。

〔宋人〕＝「宋」は春秋・戦国時代（BC四〇三〜BC二三五）にあつた国の名。宋の国の人。一般に国の名のもとに「人」がつく場合、「人」は訓読みする。「田」＝耕地のこと。水田も畑もともに「田」というが、こゝは畑の意。「折頸而死」＝「而」は上に「リテ」の送り仮名があるので訓読みせずすませる。「而」は接続詞、「そして」の意。以下の「釈耒而」「不可復得而」の場合もこれと同じ。「釈」＝手からはなす。「釈放」の「釈」。「冀」＝のぞみぬがう。

宋の国の人で、畑を耕しているものがあつた。畑の中に、木の切りかぶがあつたところ、うさが走つてきて、この切りかぶにぶつかつり、頸の骨を折つて死んでしまつた。（その人はこのうさを手に入れ）そこで、もつていたすきを手から投げ出し、切りかぶの番をして、もう一度うさを手に入れようと待ち望んだ。（しかし）うさは二度とは手に入れることはできず、彼自身は宋の国の笑ひ者となつた。



守ル 株ヲ

宋 人ニ 有リ 耕ス 田

ヲ 者。 田中ニ 有リ

株。 兎 走リテ 触レ 株

ニ、 折リテ 頸ヲ 而 死

ス。 因リテ 釈テテ 其

ノ 耒ヲ 而 守リ 株

ヲ、 冀フ 復タ 得

ンコトヲ 兎ヲ。 兎 不シテ

可カラ 復タ 得、

而 身ハ 為レリ 宋 国ノ

笑ヒト。



※語釈と口語訳は主に、遠藤哲夫著『漢文の初級コース』(学燈社)によりました。



漢点字ってどんな字？ 29

第二基本文字 その5

1. 第一基本文字と関連した漢点字

第一基本文字 第二基本文字

⠠	⠠宿	⠠	⠠写	(宀、かんむり)				
⠠	⠠学	⠠	⠠愛	⠠	⠠光	⠠	⠠文	(かんむり)
サ	⠠都	⠠	⠠陸	(邑阜)				
シ	⠠市	⠠	⠠巾	(巾偏)				
ス	⠠発	⠠	⠠冬	⠠	⠠罪	⠠	⠠虎	(夂、网、虍、かしら)
ソ	⠠馬	⠠	⠠牛	⠠	⠠羊	⠠	⠠豚	(牛羊豕、動物)
チ	⠠竹	⠠	⠠雨	(竹雨、かんむり)				
ツ	⠠土	⠠	⠠土	(土土)				
ト	⠠戸	⠠	⠠居	⠠	⠠老	(戸、屍老、かんむり)		
ネ	⠠示	⠠	⠠衣	(示衣)				
ノ	⠠私	⠠	⠠米	(禾米)				
ハ	⠠走	⠠	⠠延	⠠	⠠支	⠠	⠠遊	(走、支進、にょう)
⠠	⠠火	⠠	⠠熱					
ヘ	⠠玉	⠠	⠠王	⠠	⠠主	(玉王主)		
ミ	⠠耳	⠠	⠠身	⠠	⠠足	(耳身足)		
メ	⠠目	⠠	⠠自	(目自)				
モ	⠠門	⠠	⠠氣	⠠	⠠包	⠠	⠠区	(門、气、勹、区、かまえ)
ヨ	⠠店	⠠	⠠原	(广、たれ)				
リ	⠠分	⠠	⠠今	(八、人、かしら)				
⠠	⠠日	⠠	⠠白	(日白)				
⠠	⠠困	⠠	⠠我	⠠	⠠式	⠠	⠠用	(口、戈、かまえ)

2. 第一基本文字との関連の薄い漢点字

第一基本 第二基本文字

オ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 頁〉 ⠠ ⠠ ⠠ 君
 カ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 金〉 ⠠ ⠠ ⠠ 川
 コ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 子〉 ⠠ ⠠ ⠠ エ
 シ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 市〉 ⠠ ⠠ ⠠ 色
 セ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 食〉 ⠠ ⠠ ⠠ 鳥 ⠠ ⠠ ⠠ 魚 ⠠ ⠠ ⠠ 酉
 タ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 田〉 ⠠ ⠠ ⠠ 谷
 フ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 女〉 ⠠ ⠠ ⠠ 舟
 ヘ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 玉〉 ⠠ ⠠ ⠠ 将



第一基本 第二基本文字

ホ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 方〉 ⠠ ⠠ ⠠ タ ⠠ ⠠ ⠠ 死
 マ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 石〉 ⠠ ⠠ ⠠ 立
 ム ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 車〉 ⠠ ⠠ ⠠ 虫 ⠠ ⠠ ⠠ 羽
 ヤ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 病〉 ⠠ ⠠ ⠠ 山 ⠠ ⠠ ⠠ 矢
 ユ ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 行〉 ⠠ ⠠ ⠠ 弓
⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 心〉 ⠠ ⠠ ⠠ 桜 ⠠ ⠠ ⠠ 菊
 ン ⠠ ⠠ ⠠ 〈⠠ ⠠ ⠠ 止〉 ⠠ ⠠ ⠠ 欠



この六つの色も
基本文字の仲間よ

<small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small> シ
色 <small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small>

この字は六つ
の色を表す符号
にもなるんだね

<small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small> セ	<small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small> コ	<small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small> カ	<small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small> オ
鳥 <small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small>	工 <small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small>	川 <small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small>	君 <small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small>
魚 <small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small>	それぞれの 第一基本文字は 何だったか思い だしてね。		
酉 <small>⠠</small> <small>⠠</small> <small>⠠</small>	第一基本文字と関連の 薄い文字の続きね。 まず前回の復習から。		

シ	セ	コ	カ	オ
市	食	子	金	頁



未来

みんな基本文字だから他の文字を作る時の部首にもなるのね。

漢点字の終点

志朗

第二基本文字だから、一マス目が漢点字符号二マス目に①②③の点のどれかがつくんだ。

●	—	—	●
①	④	①	—
②	⑤	②	—
③	⑥	③	—

おねえさん

では今回の字に入りましょう。

漢点字の始点

(以下の()内は第一基本文字です。)

タ

(田)

谷

ハ

ハ

志 谷だね。音はコク、訓はタニ。

未 山の奥深い水源の意なんだって。

俗

ソク

浴

ヨク
あびる

容

ヨウ・かたち
いれる・ゆるす

溶

ヨウ
とける

フ

(女)

舟

月

未

フネね。音はシユウ、訓はフネ。小さなフネのことね。

舶

ハク
ふね

航

コウ
ふね

へ

(玉)

将

将

志 將軍のシヨウだ。

”まさに”という訓があるね。

未 何かをしようとしているところという意味ね。

将

シヨウ
すすめる

将

シヨウ
ひしお

漿

シヨウ



木

方

夕

死

死

志 未

ホ ①の点

音はセキ、訓はユウだ。で夕。

ホ ②の点
で死。

牙偏(一夕偏)になるのね。

夕

多 残

タ おおい
ザン のこる

夕 殖

セキ しお・うしお
シヨク ふえる

マ
石
立

未 人が地に足をつけて立つ形ね。



新 音

シン、あらた
オン・イン
おと・ね

親 位

シン、おや
イ
くらしい

ム

車

虫

羽

羽

志 未

ム ①の点

ムシの形の象形文字だよ。で虫。

ムシの形としては、虫・貝・爬虫類などの名前に多く用いられているわ。

蜂

ホウ はち

蛾

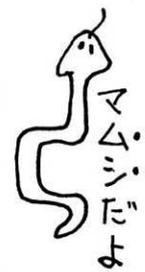
ガ (あり)

蛇

ジャ・ダ
へび

蜷

ケン しじみ



志 未 ム ②の点
で羽。

ハネの形の象形文字ね。



翼

ヨク つばさ

羽立

ヨク

ヤ

(病) 山 矢

志

ヤ

と①の点

で山。

山

と②の点

で矢。

矢

↑

↑

↑

山

未 どちらも象形文字ね。

人 山

崎

キ

さき

崎

キ

さき

とうげ

一

とうげ

知

チ

しる

知

チ

さとい

さとい

さとい

さとい

ユ

(行)

月

月

志 ユミの形の象形文字だね。

ユミ

夷

イ

えびす

夷

弟

イ

おとうと

おとうと

おとうと

おとうと

弱

ジャク

よわい

弱

強

キョウ

つよい

つよい

つよい

つよい

心

(心)

桜

桜

菊

菊

志

ル下がり

と①の点

で桜。

桜

と②の点

で菊。

菊

で菊。

で菊。

で菊。

未 もともと日本にはなかった花だね。

お

桜は木偏

ではないの？

や

や

や

や

や

や

菊も草冠

ではないわね。どうして？

や

や

や

や

や

や

未

表す符号なのよ。

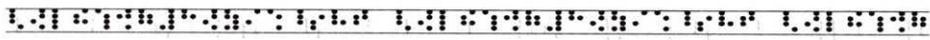
は、植物の名前を

は、植物の名前を



名も花





志 そうなんだ。

木偏、草冠
竹冠の付いた
植物の名前には
が前置される

未 つまり、この符号が
付くと、木の名・
草の名・竹の名なのね。

お 植物の名前と、そうでない
場合をくらべてみてね。

笹 や篠 と、答 や筑	蓬 と芳 茅 と葉	柿 と村 梅 と枝
----------------------	--------------------	--------------------

植物の名前



今日の近似文字

弓	舟	第2基本文字
引	丹	

作・岡田

絵・吉田

志

音はケツ、訓はカケる。
あくびの意味もあるよ。

欲 ほっする ほしい・ ヨク	飲 のむ イン	歌 うた カ	次 つき ジ
	吹 ふく スイ		

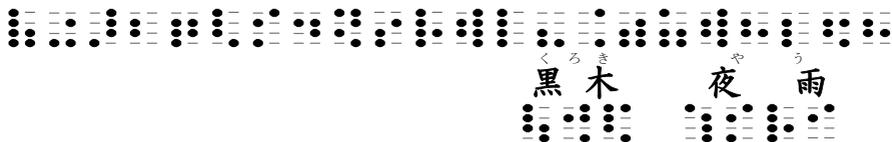


谷と欠で欲

ン
（止）
欠



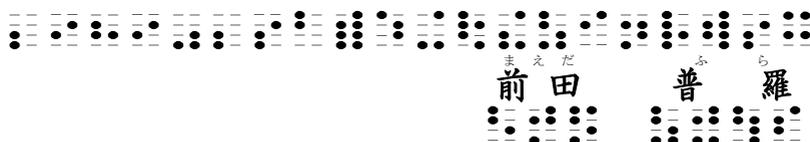
つ ゆきぐつ
 蹤いて来る子の雪沓も鳴りにけり



わ き び ざ は
 ふる雪の水の明るさ山葵沢



オリオンの真下春立つ雪の宿



(「歳時記」より)

編集後記

今年の冬は例年に比べ、比較的、暖かい日が多く、梅の花の開花が早いようで、休日ともなると鎌倉散策を楽しむ人の出足も早いようです。
 電車から降りて、仕事場より反対方向に一緒につられて歩いて行きそうです・・・？。

「梅が色づいて、とてもきれいだ。春がそこまできてますね。」こんな会話が聞こえてきます。昨年、庭(狭いので50球で畑になりす)に植えたチューリップが咲くのを心待ちにしています。リッ春よ来い♪

※紙面上の都合で新年会の写真を下記に掲載しました。

次回の発行は四月十五日です。

宇田川 幸子



新年会での乾杯の様子。(ホテルリッチにて)

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかたくお断りします。

表紙絵 岡 稲子

7. 記号類 (前号より続き)

(2) 「々 ヷ ㄥ ヷ」、繰り返し符号

① 「々 (2139)」は、漢字1文字の繰り返しです。

人々 佐々木さん

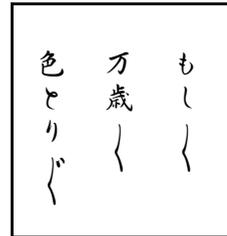
② 「々 (2135)」は、ひらがな・カタカナ何れか1文字の繰り返しに、「ㄥ (2136)」は、ひらがな・カタカナ何れか1文字に濁点を付けて繰り返し記号に用います。

あ々 ホト々ギス 金子みすゞ

③ 「々 (2133)」は、本来はカタカナ1文字を繰り返し記号ですが、2文字以上を繰り返す、くの字形の符号に充てました。

「々 (2134)」は、くの字形の符号に濁点が付いたものに充てて用います。

もし々 万歳々 色とり々



(3) 「○ △ □ ■」、伏せ字

① 「○ (217B) △ (2224) □ (2222)」は、伏せ字のマル・サンカク・シカクに用います。

② 「■ (2223)」は、伏せ字のバツに用います。

○月×日 ⇔ ○月■日

【注】上記以外にさらに伏せ字が必要な場合は、● (217C) や、◎ (217D) も伏せ字に使うことができます。

【注】以上の記号は伏せ字のみに対応します。×は数学記号(かける)で、バツ印には使えません。「○×式」は、「マルバツ式」などのように、書き替えて下さい。

【注】簡条書きの頭などに、上記の記号が使われている場合は省略するか、必要な場合は、「* ※ ☆ (2179) ★ (217a)」(いずれも後ろにスペースが必要)などに書き替えて下さい。

(5) 「+ - ± × ÷ = ≠ < > ≤ ≥ * ※」

キーボードから直接入力できるもの、

「+ (215C) - (215D) = (2161)
< (2163) > (2164) * (2176)」

記号選択、あるいは辞書登録して入力するもの、

「± (215E) × (215F) ÷ (2160)
≠ (2162) ≤ (2165) ≥ (2166) ※ (2228)」

以上の数学記号や注記の記号が、日本語の文中にある場合は、必ず両側にスペースを一つずつ入れて下さい。

1000円 + 消費税50円
明治三十年 = 一八九七年
国民総生産*の増加 ⇨ 国民総生産 * の増加

【注】日本語の文章中でも以下の場合にはスペースは入れません。

- ・ これらの記号と句読点との間。
+ と -、× と ÷。
- ・ 前に括弧の開き、あるいは後ろに括弧の閉じがある場合。
また、これらの記号を単一に括弧で括る場合。
17歳 (= 当時) (+) と (-)

【注】括弧類の閉じと開きの間にこれらの記号がある場合は、規則通り両側にスペースを入れます。

〈2002年〉 = 〈平成14年〉

【注】「=」は、幾つか重ねると実線になります。

(レイアウトの項・区切り線と枠、後日掲載、参照)

【注】「レオナルド・ダ=ビンチ」の「=」は、イコールではありません。二重のハイフンです。点字にはこの記号はありませんので、ハイフンで代用します。

レオナルド・ダ - ビンチ

【注】「* ※」は、「注」などに多用されます。これらの印と、注記の番号を示す数字との間には、スペースを入れません。

第1号に、白神山地 ※1 と屋久島 ※2、

(6) 単位記号その他

① 「° (216B) ' (216C) " (216D) °C (216E) ¥ (216F)

\$ (2170) ¢ (2171) £ (2172) % (2173) & (2175) ‰ (2273)」

以上はそのまま入力して下さい。

- ② 「Å (2272) mm (2D50) cm (2D51) km (2D52) mg (2D53)
kg (2D54) cc (2D55) m^l (2D56) KK (2D63)」

以上はそのまま単独で入力したり、全角のアルファベットと組み合わせることもできますが、mmやcmのようにアルファベットで1文字ずつ入力できるものは、全角で、m mやc mと入力して下さい。

【注】平方メートルを記号で表す場合は、「m²」を使って下さい。

(7) その他の記号

- ① 「― (2131)」は、棒線に用います。 ≡≡≡≡
② 「_ (2132)」は、小見出し符に用います。 ≡≡≡

小見出し符が「:」で表されている場合、「_」に読み替えて入力して下さい。この記号の後ろには、必ずスペースを一つ入れて下さい。

原産地_ メキシコから中央アメリカ。

- ③ 「- (213E)」は、つなぎ符のハイフンです。
(数字、アルファベットの項、参照)
④ 「/ (213F) \ (2140)」は通常スペースを伴いません。

≡≡≡ ≡≡≡

【注】詩行符として「/」が用いられる場合、後ろにスペースを入れて下さい。

まだあげ初めし前髪の / 林檎のもとに見えしとき / 前にさしたる花櫛の / 花ある君と思ひけり

- ⑤ 「~ (2141)」は、数値や場所の範囲を表す記号です。
原本では、「— — — — …」など棒線や点線が使われている場合でも、この記号「~」に読み替えて入力して下さい。
李白 (7 0 1—7 6 2) ⇨ 李白 (7 0 1~7 6 2)

- ⑥ 「〒 (2229) No. (2D62) TeL (2D64)」は、後ろに数字がきます。
「〒」と「No.」は、数字をそのまま続けて入力して下さい。
「TeL」は原則として、アルファベットでTELと入力して下さい。

【注】TeL又はTELは、後ろに算用数字が来る場合はスペースを入れ、後ろに漢数字が来る場合はスペースを入れなくて下さい。